

「ろばの子に乗って」

2022年04月07日

二人が子ろばをイエスのところに連れて来て、その上に自分の上着を掛けると、イエスはそれにお乗りになった。多くの人が自分の上着を道に敷き、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝を切って来て敷いた。そして、前を行く者も後に従う者も叫んだ。「ホサナ。主の名によって来られる方に／祝福があるように。我らの父ダビデの来るべき国に／祝福があるように。いと高き神にホサナ。」(マルコ福音書 11 章 7 節～10 節)

主イエスがろばの子に乗ってエルサレムに入城された日を、教会では「棕櫚の主日」と呼び、この日から苦難を受け、十字架の死に至る「受難週」に入る特別な日としている。

主イエスの一行はエルサレムに近づき、オリーブ山に面したベトファゲとベタニアにさしかかった。ここで主イエスは、二人の弟子に、「向こうの村に行きなさい。村に入るとすぐ、まだ誰も乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどこいて、連れて来なさい。もし、誰かが、『なぜ、そんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐここにお返しになります』と言いなさい」と言い、使いに出した。二人の弟子が出かけて行くと、表通りの戸口に子ろばがつかないのを見つけたので、それをほどこいていると、居合わせた人々が、「その子ろばをほどこいてどうするのか」と言ったので、「主がお入り用なのです」と話すと、許してくれた。エルサレムにどのようにして入るかを決め、手筈を整えられていた。そして、それに全面的に協力してくれる人がいた。

二人の弟子が子ろばを連れて来て、その背に自分の上着を掛けると、主イエスはお乗りになった。すると、多くの人々が、自分の上着を道に敷き、また、他の人々は野原から葉の付いた枝を切って来て敷いた。この枝が棕櫚で、「棕櫚の主日」と言われるようになったが、棕櫚ではなく、「なつめやし」であった。当時、馬は全てローマに徴用され、ユダヤ人が馬に乗ることはできなかった。子ろばに乗ってエルサレムに入城される主イエスはいささか滑稽ではないか。しかし、群衆は主イエスがローマからの解放をもたらしてくれると大きな期待を寄せた。この期待が、「ホサナ。主の名によって来られる方に／祝福があるように。我らの父ダビデの来るべき国に／祝福があるように。いと高き神にホサナ」という歓喜の叫びになっている。「ホサナ」はヘブライ語で「救ってください」という意味である。群衆は、主イエスをイスラエルに隆盛をもたらしたダビデの再来と期待したのである。

ところが、主イエスは群衆の期待とはまったく違うことを目指しておられた。それは、紀元前 4 世紀頃の第二ゼカリヤと言われる預言者の下記の預言の実現を示すことであった。「娘シオンよ、大いに喜べ。娘エルサレムよ、喜び叫べ。あなたの王があなたのところに来る。彼は正しき者であって、勝利を得る者。へりくだって、ろばに乗って来る／雌ろばの子、子ろばに乗って。私はエフライムから戦車を／エルサレムから軍馬を絶つ。戦いの弓は絶たれ／この方は諸国民に平和を告げる。その支配は海から海へ／大河から地の果てにまで至る(ゼカリヤ 9: 9～10)。」神は、猛々しい軍馬にまたがって凱旋する王ではなく、へりくだって、子ろばに乗って来る柔和な王を遣わす。彼は正しい者で、勝利を得、武器を無力化し、世界に平和をもたらす。主イエスは力ではなく奉仕をもって、人々が和らぐ新しい時代の到来を、子ろばに乗るご自分の姿で現したのである。しかし、この決意を理解する者は一人もいなかった。あらぬ期待を込めた群衆の叫びの中、ろばの子に乗って進まれる主イエスの孤独の深さはどれほどのものか。